
描いた夢

dony

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

描いた夢

【Nコード】

N7661Z

【作者名】

dony

【あらすじ】

大学生、一人暮らしをする男の子 柳 秀。ルックスは良いほうで、性格も運動神経も良い。でも恋に関しては偏差値40程度。そんな彼のもとで起こるライフストーリー。

第一話 前編

.....

「ねえ！先生？ねえってば！」

「あ、悪い。ポケットとしてたわ。」
と頭をポリポリ掻く青年。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿。このアンポンタン！」
とほっぺを膨らます少女。

「ごめん、ごめん。さあ課題できたか？」

「うん！」

と可愛い笑顔で返す。

「どれどれ.....」

俺、柳秀。今年大学生になった。法学部。全国的に有名な大学で、学力レベルも高い大学に入学。で高い学力の大学生つというのを利用し、家庭教師のバイトを主にやっている。他にも喫茶店のバイトなどをやり、一人暮らしをしている。実家からは大学に通えないため、一人暮らしをすることになった。仕送りもあるが、いつまでたっても親離れできない人になりたくなく、一種の社会勉強としてバイトをしている。

で今家庭教師のバイト中だか・・・こんな調子だ。でも職務怠慢とかいうわけじゃない。この女の子橋本結衣はしもとゆいには2か月弱教えてるが、中間テストで上位に立たせた。親御さんと結衣は大喜び。なんとか教師としてまっとうしている。ちなみに結衣は高2。

「どう？先生？」

「あゝミスだな。ここ。」
と指摘する俺。

「う〜〜〜〜」
しょんぼりする結衣。

「まあまあ。このところは受験でも狙われていて、多くの受験生が苦戦するところだから。」

「先生は？苦戦した??」

「全然。言つたる？俺は日本史学得意だつて。」

「う〜〜〜〜。先生に勝てる教科ないかな？」

「無い。」

「さっぱり言うな！このポケットと野郎！」

こんなやりとりが交わされる中、

ザーーーーー

「あつ…雨だ…」

くそつたれ！今日降らないって言ってたじゃん！」

「先生バカだね〜梅雨の時期に雨降らないっていうのがおかしいじゃない…！」

と勝ち誇った顔をする結衣。したり顔ってこいいうことだな…

「でなんでこんな沈んでんの？もしかして傘忘れたとか？」

「いや…ベランダに服乾かしてた…」

「ばか〜ばか〜。ざまあみる。」
とまたもしたり顔。

「はあ…。気取り直してやるぞ。」

「は〜い。」

なんでかこの後の結衣が上機嫌だった。結構いい具合に進んだ…

「じゃ、お邪魔しました。」

「いいえ。こんな夜遅くで大丈夫ですか？雨もすごい勢いで。」

この人は結衣の母親の奈央^{なほ}さん。高校生の親の割には若く見えて美人さん。そのDNAを引き継いだのか結衣も結構可愛い。

「いえ。大丈夫です。では。」

「バイバイ〜先生〜」

と笑顔で手を振る結衣。

「おう。じゃあな。」

とドアを閉め、一軒家を出た。

「はあ〜雨。ヤバいつて。洗濯物乾かないし、溜まるし。不運すぎる。」

しょんぼりしてそのまま駅に行き電車に乗り家へ歩いて帰る。今日は月曜…一週間の最初の日がこれじゃ今週なにかが起ると彼は思った。この後本当に彼の身に起こるとはマジでは思っていなかった。

第一話 中編

000 駅〜000 駅

はあくまでかよ……。あれからまっすぐ駅へ向かった。で電車にのるわけだが、満員電車の中にいるわけですよ。なんかむさぐるしい……。なんか暑い。相変わらず東京って、都会ってすごいと思う田舎育ちの俺。とその時ブレーキがかかり、体が動いた。つり革持つていなかった俺は人にぶつかってしまった。その時脳裏に浮かんだ。

【都会ってさ〜電車の中で女性にぶつかるだけで痴漢っていわれるんだぜ〜】

高2の頃の都会に憧れてた田舎もんの会話。あ、まずい……。女性だったらまずい。ぶつかった人をよく見る……

死亡フラグ成立……

顔は見えないけど、格好とか髪の毛の長さ、身長で女性と判断。やばいまずいとととととととりあえず、

「すいません。」

謝る俺。これでいいよな・・・悪いことしたらとりあえず謝る。それが人間ってもんでしょ？なんかいいこと言った俺。で相手の反応は？

無し・・・チーン

あ、怒ってんのかな？それともかかわらないでこの変態！なのかな？反応無しじゃなんにもわからん。どーしょ。どーしょ。混乱する俺。その時下を向いているその女の人の顔が一瞬見えた。

あれ？泣いてる？まさか俺のせいかな？ならまじごめんなさいだよ。どーしょどーしょ。と混乱する俺にある光景が見えた。

お尻触られてる。手元主は片手に新聞の禿げた中年メガネじじい。これはまさしく痴漢。え？他の人は気づいてるんじゃないの？気づいてないのか・・・

「ヒクッソ。」

泣いてる。彼女泣いてるよ。これは彼女が可哀そうだ。こんなの嫌に決まってる。行くしかない！

「あの～すいませんこの手はなんですか？」
と新聞ハゲ中年じじいの痴漢してた手を掴む。

「あわわわ。離せ！このガキい」

その時不運にも駅に到着。俺の手は離され、じじいは逃げる。満員電車の混雑をブルドーザーのよるになぎ倒す。

「待て！」

とじじいを追う。やつは階段を上っていく。俺も急ぎ上る。奴は一段ずつ登っているのに対し俺は二段上りで追う。もちろんこれで追いつく。あと一歩・・・観念しろ！と思った瞬間。

「えいや～」

「グッ。」

まさかあいつが急に振り向きビジネスバックを振るとは・・・やばいまともに受けた俺は階段から落ちていく・・・

どきっ

「痛い～。」

結局ホームまで落ちました。あ、あのじじい階段上り終わった。追いつく可能性が無くなった。でも・・・でも・・・あきらめたら試合は終了だ・・・安西先生・・・あざす！

「うおおおおお。」

夜なのに大声をだしました駆け上る。あいつを追いかけのるのに夢中で改札をそのまま突破。するとタクシーに乗るあいつだった。その時ひらめいた。

「勝った……。」
「急ぎタクシーが通ろうとする車道に出てど真ん中に立つ。駅の近くの車道って一方通行多いよね」案の定タクシーはクラクションを鳴らす。そして大声で。

「そいつは痴漢です！」
タクシーの運転手がびっくりする。で痴漢じじいを見る。慌てたのか痴漢じじいは車道に出る。そして奴が俺に向かってくる。いまにもビジネスバツクを横に大振りつてか。今度はさせないぜ。

「お返しだ。」
と俺は振ったタイミングでしゃがみ足を引つ掛けじじいを転ばせる。そして俺は転んだ奴に

「観念しろ。」
終わった……その時

「俺が痴漢つて証拠はどこにあるんでんだ！？ああん？」
苦し紛れの策を言いやがって。

「往生際悪いなこの！」
殴ろうとした瞬間警察に取り押さえられた。え？

「待ってあの……そい「わかってる。痴漢だろ彼女が教えてくれたよ」
と別の警官が痴漢じじいを取り押さえた。」

「あっ……はい」

「とりあえず。事情を聞く前に頭の血なんとかしないかね。」
え？あ、気づけば頭から血流してた。階段から何段も落ちたからね。
夢中だったから・・・あっ

「おい？君大丈夫・・・」

警官の言葉が途中のところで気を失った。

第一話 後編

・・・

あれ？どこどこだ？ベットから起き上がる俺。なんだここ？どこにいるの？とはてなまーくいっぱい俺。すると

「あれ？起きたんですね。よかったです。」

と女の子が部屋に入ってきた。可愛いじゃねえか。こんな女の子がなんのよう？

「あのう・・・」

「はい。」

「きき昨日は

ありがとうございます。」

????あれなんでこんな可愛い子ちゃんからお礼が？

「あの〜なんかしました。俺？実はここどこだかわからないし、な
んでここにいるかわからんし。そしてあなたとはどういう関係です
か？」

「あの〜覚えてないんですか？昨日のこと。」

「昨日？う〜ん

あ、まさか。昨日電車…痴漢じじいを追ってから〜

ぬ。まさか痴漢された人？あつすいません失礼でしたよね。」

「いいえ。いやその〜大丈夫です。本当にありがとございました。」

「
丁寧に頭を下げる彼女。やっとだが、今の俺の状況が分かった。気
を失ったあと病院に緊急搬送され、頭を縫った。で今ベットにいる
わけだ。OKわかった。」

「
いいえ。普通のことを普通にやったわけです。お礼にはおよびま
せん。あのう…バイトとか大丈夫ですか？」

「
いえ私はバイトをしていません。親と暮らしています。最近バイ
トを探してるんですが…割に合わなくて。」

「そうなんつすか。じゃ俺のこのバイト先どうつすか〇〇駅…」
と彼女に俺が働いているバイト先紹介した。自給もよく、条件がと
てもいいからね。店長も女性のバイトをちよつと欲しがってるし。

「あつ。じゃ電話番号教えてくれる？」

「〇K…あら？携帯がない？つていうかバックがない？」

「あつ。スイマセン私です。私が持ってました。盗まれるとあれな
んで…でも私は盗みませんよ。恩をアダでかいせませんもん。」

あ、やつはこの女の子可愛いな。よく見ると。髪はロングでスタ
イルいいし、身長は155くらいかな？動物で例えると子犬みたい
だ。とにかく可愛い顔してるし。

「聞いてますか？秀さん？」

「あつ…は、はい聞いてます。」

ふつ…あなたが可愛すぎて…見とれてましたなんか言えな
いよ。どつかのイタリア人みたいな口説き方じゃあるまいし。でも
返事が少し慌て気味だったよな…

つて、え？

「なんで俺の名前知ってるの？」

「あの…言えば長くなります…」

なんと俺が起きる20分前。喫茶店の店長からTELが入った。彼
女は30分前にここにきて看病してたらしい。で出ようか出ないか
迷う。ディスプレイに店長つと表示されており、バイト先で催促だ

つたらずいと思い勇気をもって電話に出て、昨日のことを含めた事情を話したらしい。

火曜日なので喫茶店のバイトだった。PM5・00～PM11・00までだ。でもこういう事態を彼女が教えてくれたわけでありますので、サボリではなくなつた。

で名前だが、店長が彼女に名前を教えたとついうわけです。

「そついえば、あなたの名前は？」

「三輪 美季といます。（みわ みき）。英正大学の経済学部の1年生です。」

「あれ？英正大？俺も同じ。俺、法学部そして同い年か…。奇遇だね。どこに住んでるの？」

「〇〇〇〇駅で。」

その後自己紹介的なトークで長らく話した。駅も近いし、電車一緒だということがわかった。彼女は一人暮らししている自分に驚いた。まあそつだろな。田舎出身であることも一応のことをお互い知つた。

「で、俺の事情聴衆はどうなるの？」

「はい。7時に警察の方がここ来ます。そしたらパトカーで病院から自宅まで送ってくれるそつです。」

「そっか」。

あー！洗濯物おおおお。」「
大切なことを思い出したわけだ。ガツクリ。

「どうかしました？」

「いいえ大丈夫です。」

はあ〜クソツタレ・・・

その後事情聴衆をし、親切にも自宅までパトカーで送ってもらった。
家に入ったとき洗濯物と格闘した俺だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7661z/>

描いた夢

2011年12月26日00時46分発行